

# 哲學研究

第百五十四號

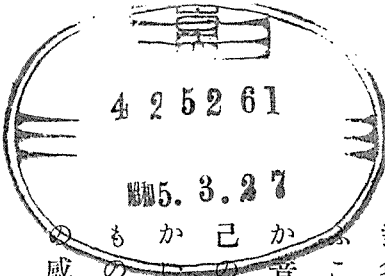
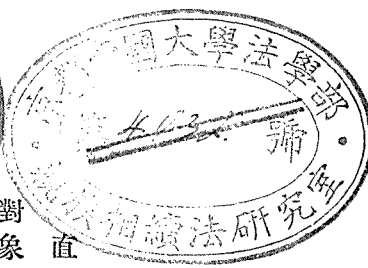
第十四卷  
第一册

直覺的知識

西田幾多郎

直覺するといふことは自己が自己に於てあるものを直に知ると云ふことである、  
對象が自己に内在的なることを意味するのである。眼で見るとか耳で聞くとかい

ふことが直覺と考へられるが、かゝる場合、直覺の對象となるものは物理的なる色と  
か音とかいふものではなく、又非實在的なる表象、自體といふ如きものでもない。自  
己の感覺とか知覺とかいふものゝ内容でなければならぬ。色自體とか音自體と  
かいふものが直覺の對象となると考へられるかも知れぬが、眞に直覺の對象となる  
ものは一般的なる色自體とか音自體とかいふものではなく、私の現在の色の感覺、音  
の感覺、其者でなければならぬ。色とか音とかいふものが我々の表象の内容と考



直覺的知識

へられるから、内在的と考へられるのであるが、個人的意識に對しては、色自體とか音自體とかいふ如きものも超越的でなければならぬ。色は色自身の體系を有し、音は音自身の體系を有するのである。直覺するといふことは單に志向するといふことではない、對象其者を知ることである。知るものと知られるものとが一となることである。右の如く考へるならば、自己が自己自身を知ると云ふことが直覺の根本的意義でなければならぬ。見るとか聞くとかいふことが直覺と考へられるのも、自己自身に於てあるものを知ると云ふ意味に於て、直覺と考へられるのである、感覺とか知覺とかいふものは自己の種々なる様相と考へられる爲である。自己自身の作用を知る内部知覺といへども、それが一種の知覺と考へられるかぎり、その根柢に自己自身を知るといふことがなければならぬ。かゝる自己自身を知るものゝ作用としてそれが直覺と考へられるのである。

右の如く自己が自己自身の事實を知ることが疑ふべからざる直覺的知識と考へられると共に、一方に於て全然個人的自己を超越したものと考へられる數學的知識の如きものが直覺的と考へられる。色自體の知識、音自體の知識といふ如きものも同様の意味に於て直覺的と云ひ得るでもあらう。自己自身を知ると云ふことを直

覺と考へるなら、數學的對象の如きものも自己に內在的と考へられねばならない、數學的知識が先天的と考へられる所以である。併し數學的對象といふ如きものは何處までも個人的自己に超越的でなければならぬ。如何にしてかゝる對象が內在的と考へ得るであらうか。若し超越的自己といふ如きものが考へられるとするならば、超越的自己といふ如きものが如何にして自己と云ひ得るであらうか。我々の自己と考へ得るものは、何處までも個人的でなければならぬ、何人の自己でもない一般的自己といふ如きものは自己と考へることはできない。その外藝術的直觀の内容といふ如きものも、それは知識と云はれないとしても、一種の直覺的内容と考へられるであらう。藝術的直觀は主觀的と云つても、單に個人的主觀に屬するものではない。道德的規範の如きものでも良心の命令として直覺的と考へられる。斯く種々なる意味に於て直覺的と考へられるものが、如何にして自己自身を知ると考へ得るであらうか。

我々の意識は一方に於て實在的になると共に、一方に於て何等かの對象を志向する

と考へられる。現象學者の語を以て云へば、ノエシス的なると共にノエマ的と考へられる。直覺的意識に於ては、對象が内在的とまで考へられねばならない。如何にしてかゝる意識といふものが成り立ち、如何にしてかゝる意識といふものが考へられるであらうか。我々が實在的と考へるものは先づ何等かの意味に於て時間的なものでなければならぬ、時の範疇に當嵌めて考へられるものでなければならぬ。かゝる意味に於て實在的なるものが、如何にして非時間的なる對象を志向し、更に之を含むとまで云ひ得るであらうか。又逆に對象的なるものゝ方から云へば、それが如何に之を分化發展し行つても遂に實在的なるものに到達することはできない、何處までも對象の體系的發展に過ぎない。對象と區別して意識内容と考へられるものであつても、苟も意識せられたものとしては對象の體系に屬するものでなければならぬ。若し意識的實在と考へられるものが志向的であるとすれば、その實在的といふ意味は對象的實在の意味とは異なつたものでなければならぬ。

我々は種々なる意味に於て「有るもの」といふものを考へることができらるであらう。併し苟も有るものと考へられるものは主語となつて述語とならないものでなければならぬ。アリストテレスの第一本體の定義がすべての有るものを包括する最

も適切なる語と云ふことができる、眞實在は個物的なるものでなければならぬ。併し個物的なるものは一般的なるものに於て考へられるのである、一般的なるものゝ分化發展の極限に於て個物的なるものが考へられるのである。判断といふのは具體的一般者の自己限定の過程と考へるならば、主語となつて述語とならない個物といふのは、具體的一般者の超越的述語面即ち私の所謂場所に於てあるものと云ふことができる。一般者其者の性質の異なるに従つて、種々なる意味の有るものが考へられるのである。一度的なる實在といふも、かゝる意味に於て考へられるものでなければならぬ。意識的實在といふのは單なる時間的實在ではないとしても、それが實在のと考へられるかぎり、かゝる方向に於て考へられるものでなければならぬ。

意識に於て我々が實在のと考へるものは、我に屬するものである、我に於てあるものである、我といふものを對象的に考へるならば、何處までも個物的なるものである、個別化の無限なる行先とも云ひ得るであらう。かういふ意味に於ては、所謂主語となつて述語とならない個物をも越えてあるものと云ひ得るであらう。之に反し、知るものとしてはそれは何處までも對象的なるものを内に包むものである、所謂個物

的なるものをも包むものである。否個別化の無限の行先をも包むと云ひ得るであらう。唯實在として個物的なる私は判斷の主語的方向に於て、所謂主語となつて述語とならない個物的なるものを越えると共に、之を包むといふ方向に於ては、判斷的自己自身を限定することによつて、之に於て判斷的知識が成立するといふ具體的一般者の超越的述語面をも越えたものでなければならぬ。我に屬し我に於てあるとして考へられる意識的實在なるものはかゝる關係に於て限定せられるものである。我々が何物かを考へると云ふことは一般者の自己限定といふことを意味するとするならば、意識的實在とは判斷的一般者を越えて之を内に包む一般者に於て限定せられるものと云ひ得るであらう。我とはかゝる一般者を意味するに外ならぬ、いかゝる一般者の自己限定を我々は「私が知る」といふのである。

それで此の如き私の自己限定たる我に於てあり、我に屬するものとして、實在的と考へられるものは、判斷の主語的方向に於てその極限たる個物をも越えたものでなければならぬ。すべて一般者の自己限定が進むに従つて、於てあるものが自己限定的となる、主語的なるものが述語的なるものを含む様になる、所謂個物的なるものに於て、述語的なるものが主語的なるものに於てあると考へられる。述語的なるも

のは先づ物の屬性と考へられ、更に物の働きと考へられる。併し之を越ゆれば、主語的なるものは全然判断的一般者の述語面をも超越したものとなる。述語的なるものは主語的なるもの假相となるのである。實在とその顯現との間にもはや判断の主語と述語との結合はない。物に於ては屬性は物の全體ではないが尙その一面を現すものと云ひ得るであらう、働くものに於ては述語的なるものが述語が主語となると云ひ得るであらう。意識作用といふ如きものに至つては、全然述語的限定を超越して、述語的なるものをその不適當なる限定となす、云はゞ異類的限定となすのである。自己と類を異にするものによつて自己を限定すると云には、自己は自己を限定する一般者の外にあるものでなければならぬ。併し全然關係なき二つの一般者に於てあるものは一が他によつて自己を限定すると云ふこともできない、一つの一般者を超越して而も之を内に包む一般者に於てあるものにして、始めて斯く云ふことができるのである。主語的方向に超越するもの、此の如き限定が志向作用と考へられるのである。内に包むといふ關係が薄くなればなる程、志向作用は單に符號的となる。併し何處までも一が他を包むと云ふ關係が残されねばならない。個物的なるものは屬性として述語的なるものを有つと考へられる如く、意識的實在は何

等かの意味に於て自己に類を異にするもの即ち對象的なるものを内に包むと云ふことがなければならぬ。

判斷的一般者を越えて之を内に包む一般者、即ち自覺的一般者に於て有るもの、考へられるものは、右の如く考へられると共に、判斷的一般者に於て述語的方面に立つたものは如何なる性質を帯びて來るであらうか。一般者の自己限定が進むに従つて、之に於てあるものが自己自身を限定し互に相媒介するものとなると共に、前に抽象的一般者と考へられたものは、もはや包むと云ふ意味を失つて單に法則的となる、法則とは包むことのできない不完全なる一般者である、推論式一般者に於て小語面に對する大語面といふ如きものがそれである。併し法則的なるものは尙個物的なるものを包むといふ意味を有し、判斷的一般者の述語的方面に立つと考へねばならないが、主語的方向に於てあるものが判斷的一般者に於てあるものを越える、考へられる時、述語的方面にあるものは之に對して對象的性質を帯びて來る、自己に對立する對象界となるのである。對象界とは述語面的超越として我々の意識内容を限定すると考へられるが、意識的存在其者を限定することはできない、却つて意識的自己は自己の内容として對象を包むと考へることもできる。意識するものと意識



對象界との關係は判斷の主語と述語との關係に相當するのである。於てあるもの意味が深くなるに従つて、個物が述語的なるものを含むと考へられる如く、意識はその對象を包む様になる、即ち意志的となるのである。對象界と考へられるものは恰も述語的統一面と考へられた抽象的一般者に相當するのである。

すべて具體的一般者は自己の中に自己限定面を有つ、判斷的一般者に於ては抽象的一般者と考へられるものがそれである。判斷的一般者に於てあるものは、抽象的一般者に於て述語を有つことによつて自己自身を限定するのである。判斷的一般者が判斷的に自己自身を限定すると云ふことは、之に於てあるものが抽象的一般者に於て自己自身を限定することであり、逆に抽象的一般者は判斷的一般者に於てあるものゝ述語的統一面と云ふこともできるのである。私と云ふものが主語となつて述語とならない個物をも越えてあるものと考へられる時、それは判斷的一般者の最後の自己限定面をも越えたものでなければならぬ、如何なる意味に於ても判斷的一般者に於て限定することのできないものでなければならぬ。判斷的一般者に於ては先づ抽象的一般者がその限定面となる、即ち物は述語的に限定せられる。併し一般者の自身の自己限定が深くなるに従つて、かゝる限定面は推論式的一般者

の大語面といふ如きものとなる、之に於てあるものは法則として限定せられるのである。更に一般者自身の自己限定の意味を深くすればそれは範疇的限定となる。判斷的一般者の最後の自己限定は範疇的限定でなければならぬ、述語的なるものが有るものを限定するのである、場所が場所自身を限定するのである。併し我に於てあるものはかゝる限定をも越えたものでなければならぬ。「時」の範疇が判斷的一般者に於て實在を限定するとすれば、我に於てあるものは「時」の範疇をも越えたものでなければならぬ。それは判斷的一般者に於てあるものを越えたものとして、範疇的に限定すべからざるものであると共に、物が述語的に自己自身を限定する如く、範疇的に自己自身を限定するものでなければならぬ。我に於てあるものは自己自身を對象化することによつて、自己自身を限定するのである。而もそれは判斷的一般者を越えてあるものなるが故に、判斷的一般者の最後の限定といへども、單に抽象的として不適當なる限定たるに過ぎない、恰も抽象的一般者の特殊化的限定が個物の限定として不適當なると同様である。判斷的一般者は更に之を包む自覺的一般者の自己限定面として、その抽象的一般者に相當すると云ふことができるであらう。我々が對象界を自己に外的と考へるのは、兩者の間に判斷的一般者の統一が

成立せないからである。推論式的一般者に於ては、小語面的方向にあるものと大語面的方向にあるものとは、尙共に廣げられた判斷的一般者に於てあると云ひ得るであらう。小語面的方向にあるものも、尙判斷的一般者の場所其者の限定ともいふべき範疇的限定によつて有るものと考へられるのである。更に之を兩方向に超越した時、もはや判斷的一般者によつて兩者を包むと云ふことはできない、兩者は全く類を異にしたものと云はねばならぬ。併し意識的實在が有るものとして考へられるかぎり、それは判斷的一般者を越えた自覺的一般者に於てあり、之に於て限定せられたものとして、抽象的限定面と考ふべき對象界に於て自己自身の内容を限定するものである。かゝる限定が志向作用と考へられるものである。物が屬性を有つと云ふ如き意味に於ては、ノエマ的なるものはノエシス的なるものに於てあるのである。自覺的一般者の限定が深くなるに従つて、之に於てあるものは自覺的に自己自身を限定するものとなり、即ち對象を内に包むものとなる、かゝる限定を我々は知ると考へるのである。

意識的有と考へられるものは、自覺的一般者に於て限定せられたものである。判

斷的一般者に於て有として限定せられたものは抽象的一般者を限定面として述語的に自己自身を限定する如く、自覺的一般者に於て限定せられたものは、判斷的一般者の超越的述語面即ち所謂對象界に自己自身を映すことによつて、即ち對象化することによつて自己自身を限定する。かゝる限定が意識するとか知るとか云ふことの根本的意義である。單に意識的有といふ意味に於ては、判斷的一般者に於てあるものが述語を有つと考へられる如く、すべて志向的と云ふことができるであらう。併しすべて具體的一般者に於てあるものは、自己自身を限定するものでなければならぬ。自覺的一般者に於てあるものは自覺的に自己自身を限定するものでなければならぬ、即ち自己自身を對象化するものでなければならぬ、自己自身を知るものでなければならぬ。所謂客觀的對象界とは判斷的一般者に於て抽象的一般者が述語的統一面と考へられる如く、各自己の對象界の統一面に過ぎない、志向作用といふのは無なる自己の自覺作用と考へることができる。志向的意識面といふものは自覺的一般者に於ける無媒介的限定面として抽象的一般者の限定に當るものである。

それで、判斷的一般者に於て限定せられたものが所謂實在としてその限定作用が

働きと考へられる如く、自覺的一般者に於て限定せられたものが知るもの即ち私としてその限定作用が知ると考へられるのである。併し眞に働くものとして自己自身を限定するものは、判斷的一般者に於て限定せられるものではなくして、判斷的一般者其者でなければならぬ。眞に知るものは自覺的一般者に於て限定せられたものではなくして、自覺的一般者其者でなければならぬ。自覺的一般者に於て限定せられると云ふ意味を有するかぎり、それは知られたもので眞に知るものではない。判斷的一般者に於て無限に主語的方向への超越が考へられると共に、述語的方向への超越が考へられる如く、自覺的一般者に於てもノエシス的方向への超越が考へられると共に、ノエマ的方向への超越が考へられる。唯自覺的一般者に於てあるものが限定せられるかぎり、所謂知るといふことが成立するのである。我々は通常限定せられた自己といふものがあつて知ると考へて居るが、自己と考へられたものも眞に知る自己ではない、自覺的一般者に於て限定せられた一種の有るものに過ぎない。之に反し感覺や知覺の如きものであつても、自覺的一般者に於て有るものとして限定せられるかぎり、それは知るものと云ふことができる。又意志といふ如きものに於ては、所謂自覺的自己以上に知るものと云ひ得るでもあらう。更に知的直

觀といふ如きものに至つては、全然意識的自己を没した所に、眞に知るといふことがあると考へることもできるであらう。

## 二

以上、私は判斷的一般者を主語と述語との兩方向に超越することによつて、自覺的一般者といふものを考へたのであるが、判斷的一般者を越えて之を内に包むと考へられる自覺的一般者は、それ自身の限定を有たねばならぬ。判斷的一般者を越えるといふことは、既に自覺的一般者に於てあるものが判斷的に限定することができないと云ふことを意味するのである。加之、判斷的一般者が自覺的一般者に於てあり、之によつて包まれるとするならば、逆に判斷的一般者は自覺的一般者によつて限定せられるものでなければならぬ、判斷的限定は一種の自覺的限定でなければならぬ。

自覺的限定とは如何なるものであるか。それは自己が自己自身を知るといふことである、自己が自己自身を限定するといふことである。常に限定するものが限定せられるものであり、限定せられるものが限定するものであるのみならず、自己が自

己自身を包むものでなければならぬ、自己は自己に於て自己を限定するのである。知るといふことの根本的形式を判断と考へ、判断とは一般者の自己限定と考へるならば、知ることを知ると云ふことは、一般者が一般者自身を限定すると云ふことではなければならぬ、場所が場所自身を限定すると云ふことではなければならぬ。自覺的一般者の限定といふのは此の如き限定を意味するものでなければならぬ。判断的一般者の限定といふのは、かゝる立場から見ても一般者が限定せられた上に成り立つ一般者の限定に外ならぬ、即ち限定せられた自己の限定に外ならぬ。判断的知識は自己が自己を限定することによつて成立するのである、自己が自己を反省することによつて知識が成立するのである。無論、此に自己が自己を限定すると云ふのは、個人的自己の反省の如きものを意味するのではない。「私がある」といふことは既に判断的一般者の述語的超越を示すものである、之に於て主語的なるものを限定することのできない一般者自身の直接限定を意味するものである、主語が述語面の中に没入したことを意味するのである。私があるといふことを知るといふ時、既に場所が場所自身を限定することを意味するのである、而して自己が自己を知らぬ自己はない、此時既に判断的一般者の限定と異なつた限定が確立せられるのであ

る。

それで自覺的一般者に於て或ものがあると云ふことは判斷的一般者の立場からは場所が場所に於てあると云ふことであり、自覺的一般者の限定といふのは述語面が述語面自身を限定することである、之を我々は自己が自己自身を對象化すると云ふのである。限定せられた自己の對象面は直に判斷的一般者の超越的述語面として、自己自身を判斷的に限定する意味を有するのである。自覺的一般者の限定に於ては、その能限定的自己の方向に立つものが之に於てあるものとして、主語となつて述語とならない實在的意義を有し、之に反し、その所限定的自己の方向に立つものが自覺的一般者の抽象的限定面に於てあるものとして、いつでも判斷的一般者の述語面的意義を有するのである。判斷的一般者に於てあるものが述語的に自己自身を限定する如く、自覺的一般者に於てあるものは、自己自身を對象化せなければならぬ。自己自身を對象化するかぎり之に於てあるものが考へられるのである。無論、自己自身を對象化する自己其者の内容は單に對象化することによつて限定することはできない、單に對象面に於て限定せられたものは物たるに過ぎない。縱、それが對象的に自己自身を限定するとしても、かゝる自己は單に形式的なる一般的自己たるに



過ぎない。眞に自己自身を對象化する自己其者の内容を現すものは、我々の情意的内容でなければならぬ。個物が抽象的一般者を越えてあると考へられる時、抽象的一般者は述語的統一面と考へられる如く自己が自己自身を限定する對象界を越えてあり、之を以て自己自身の限定面となすと云ふ時、所謂對象界は情意の對象界とならねばならない、之に於てあるものは自己に對して愛するものか又は惡むものになければならない。具體的内容を抽象した自覺的限定が純なる知的自覺的限定と考へられるのである、而してそれは判斷の超越的述語面の意味を有するのである。故に對象界といふのはいつでも二様の意味を有つて居る。自覺的一般者の限定面としては、抽象的自己の存在を意味すると共に、判斷的一般者の超越的述語面としては、所謂客觀的存在を限定する意味を有つて居るのである。

述語面が述語面自身を限定すると云ふことを以て自覺的限定となし、之を以て自覺的自己を考へようとするのは不十分と考へられるであらう。今は唯、判斷的一般者の立場から見て知的自己を論じて居るのである。述語面が述語面を限定するといふことは、後に云ふ如く直覺面的限定といふことであつて、睿智的ノエシスの限定を意味するものである。判斷的一般者と自覺的一般者との關係は後に至つて明となるであらう。

我々が客觀的對象界といふものを考へる時、いつも判斷的一般者の限定として考へるのであるが、我々の自己といふのが判斷的一般者に於てある最後のものをも越

えてあるものであり、自覺的限定といふのが述語面が述語面自身を限定すると云ふ意味を有するとするならば、判斷的一般者は自覺的一般者に於てあり、之に包まれたものとして、判斷的一般者の限定は自覺的一般者の抽象的限定即ち知的自覺として考へられなければならぬ。判斷的限定の背後に何處までも自覺的限定の意味が含まれて居なければならぬ。自覺的限定によつて判斷的限定が成立すると云ふことができる。自己は何處までも對象的に限定することのできないものでなければならぬ、即ち對象化することのできないものでなければならぬ、對象界を以て自己自身の限定となすものでなければならぬ、自己自身を對象化するものでなければならぬ。眞の自己は意志的自己でなければならぬ。而してかゝる意味に於て自己が判斷的一般者を包み、判斷的一般者の超越的述語面其者を直に自己限定面となすには、我々は意識的自己其者の底に超越せなければならぬ、所謂自己自身の底に超越することによつて客觀的對象界を包むと云ふことができるのである。かゝる自己がカント哲學に於て意識一般とか純粹我とか考へられるものである。それは述語面が述語面自身を限定すると云ふ意味に於て自覺的限定と考ふべきものであり、その限定が述語面自身の限定即ち範疇的限定として客觀的對象界を限定するものである。

我々の自己が自己自身を知ると云ふ時、自己として自覺的に限定せられた自己即ち意識せられた自己は知る自己ではない。眞に知る自己はかゝる限定を自己自身の限定となすものでなければならぬ。故に自己が自己自身を失つた時、眞に知る自己となるのである。自己が自己自身の對象界面から逆に限定せられる中は、眞の自己ではない。かゝる限定が成立するかぎり、自覺せられた意識的自己として、對象界を包むと云ふことはできない、かゝる限定が自覺的一般者の限定である。自己が自己の對象界を超越して之を内に包むと云ふには、自覺的一般者に於てあるものをも越えなければならぬ、即ち知的直觀の一般者に於てあるものとならねばならぬ。

自覺的一般者に於てあるものは自己自身を對象的に限定すると共に又對象的に限定せらるゝ意味を有つたものである。述語面が述語面自身を限定するといふ時、それが限定せられた述語面としては、判斷的一般者として之に於て客觀的有を限定する意味を有し客觀的對象界と考へられると共に、自己自身を限定する述語面としては、自己が自己自身を限定する自己の限定面として、自己の意識面と考へられねばならない。故に自覺的一般者の自己限定面は常に兩様の意味を有し、相反する方向に主觀界と客觀界との對立が考へられ、之に於てあるものは兩様の世界に屬すると考

へられる。判斷的一般者から考へれば、客觀界が主觀界を限定すると考へられるが、自覺的一般者が判斷的一般者を包むといふ意味に於ては、主觀界が客觀界を包むと考へなければならぬ。自覺的限定の極限に於ては、自己が自己の奥底に超越することによつて、客觀界を包むと考へることができる。是に於て自覺的一般者の限定面として考へられた對象界は、睿智的自己の自己限定としてイデヤの實現の場所となるのである。

後に云ふ如く判斷的一般者と自覺的一般者との關係は、睿智的自己のノエマ的限定面とノエシシ的限定面との關係となるのである。

#### 四

我々の知識は判斷的一般者の限定として成立する。併し判斷的一般者の限定が成立するには、先づその一般者自身が限定せられなければならない。その述語面が限定せられなければならない。述語面が述語面自身を直接に限定するのは自覺的一般者の限定によらなければならない。我々の知識は自覺的限定から始まるのである。自覺的一般者の限定が成立するかぎり判斷的一般者が限定せられ、之によつて我々

の知識が成立するのである。デカルトの云つた如き意味に於て「私がある」といふことは、既に超越的述語面自身の獨立を意味するものである。述語面自身の直接限定といふことが、自覺的一般者の限定として私があると考へられるのである。客觀的知識の根柢として考へられる私といふのは、既に自覺的一般者の限定をも越えてあるものでなければならぬ。有るといふことも云はれないものでなければならぬ。それは既に叡智的自己としてイデア其者を見るものでなければならぬ、客觀的知識はかゝる自己の自己限定として成立するのである。

我々の客觀的知識の根柢には自己自身を見るものがなければならぬ、見るものなくして見ると云ふ如きものがなければならぬ、知的直觀の一般者の限定によつて客觀的認識が成立すると考へねばならない。無論、知的直觀の一般者に於て限定せられる叡智的自己其者の内容といふのは、概念的知識として限定することのできないものであらう。概念的知識の立場から見れば、それは創造的自己の内容でなければならぬ、ベルグソンの純粹持續の内容の如きものでなければならぬ、尙一層深い意味に於ては、時を超越した藝術的直觀の内容の如きものでなければならぬ。かゝる自己の内容が述語面的に限定せられ得るかぎり、概念的知識が成立するので

ある。述語面が述語面自身を限定するといふことが自覺的限定であり、自己が自己自身を限定するといふことが述語面が述語面自身を限定するといふことである。而して自己自身を限定する述語面即ち對象界が直に自己其者として自己が自己を失つたと考へられる時、それが睿智的自己の自己限定面となるのである。かゝる自己の内容として之に於てあるものはすべて自己自身を見るものでなければならぬ。色も色自身を見るものであり、音も音自身を聞くものでなければならぬ。カントの意識一般といふ如きものを單に論理的と考へるから、形式的主觀として何等の内容を有せないものと考へねばならなくなるが、それは知的直觀の一般者に於ける睿智的自己としては直觀的でなければならぬ、所謂經驗内容を直觀的内容として自己の内に見るものでなければならぬ。カントが私が考へるといふことが私の表象に伴ふと云つた私は、かゝる直觀的自己でなければならぬ。かゝる場合、考へられる自己即ち意識的自己は既に消失せるが故に、色が色自身を見音が音自身を聞くと言つてよいのである。併し嘗て「睿智的世界」に於て論じた如く、カントの意識一般といふ如きものは知的直觀の一般者に於ける形式的自己として、それ自身の内容を有せざるが故に、その直觀の内容は未だ人格的個性を帯びたものではない、即ち藝術的直

觀に至らないのでなければならぬ。かゝる睿智的自己の直觀からその對象界構成の意味を除去するならば、フツサールの本質直觀といふ如きものとなるであらう。フツサールの現象學的立場といふのは意識的自己を超越的自己の立場にまで進めたものである。彼は意識の本質を表象性に置いて自覺的限定に置かないからである。

判斷的一般者が自覺的一般者によつて包まれると考へられる時、判斷的一般者の自己限定面の意味が變せられる如く、自覺的一般者が知的直觀の一般者によつて包まれると考へられる時、限定面の意味が變せられなければならぬ。自覺的一般者に於ては、その限定面が一方に客觀的對象界の意味を有すると共に、一方に主觀的意識面の意味を有つて居る、自己の限定面たると共に、逆に自己を限定する意味を有つて居るのである。知的直觀の一般者に於ては主觀が客觀の中に没し、客觀即主觀として、自己自身を見るものゝ自己限定面とならなければならぬ。かゝる限定面に於てあるものは、すべて直觀の對象でなければならぬ。かういふ立場から見れば、嚮に自覺的一般者の限定として考へられたものも、知的直觀の一般者に於ける自己の限定に基くものと考へることができ、自覺的に自己自身を限定する自己の根柢に自己自身を見る自己があり、自己を限定すると考へられる對象界の背後には直觀的なる

ものがなければならぬ。恰も判斷的一般者の限定の根柢に自覺的一般者の限定があり、その自覺的内容を除去した抽象的限定が判斷的一般者の限定と考へられる如く、知的直觀の一般者の限定から叡智的自己の内容を除去したものが自覺的一般者の限定と考へ得るであらう。

知的直觀の一般者の限定として成立する叡智的自己の内容は直觀的として、我々の知識を超越したものでなければならぬ、時を超越した永遠なるイデア其者の内容として藝術的直觀の内容の如きものでなければならぬ、唯その抽象面的限定として知的叡智的自己の内容たる所謂知識の世界が成り立つのである。知的叡智的自己の限定は先づ自覺的一般者の限定と考へられねばならぬ。カントの意識一般といふものも單なる論理的意識ではなくして、自覺的意識でなければならぬ。具體的一般者の自己限定面に於て現れるものは、いつでも之に於てあるもの、抽象的内容である。知的叡智的自己の限定面に於て現れるものは自己自身を見るもの、抽象的内容に過ぎない。判斷的一般者の限定面たる抽象的一般者の底に個物が見られねばならぬ如く、知的叡智的自己の限定面の底にも叡智的自己が見られねばならない。反省によつて考へられる我々の意識的自己とは斯くして考へられる叡智



的自己の影像に過ぎない。判斷的一般者の限定面たる抽象的一般者からしては、個物は何處までも不可知なる或物でなければならぬ、強いて之を述語化すれば單なる名目となるの外はない。知的直觀の一般者の限定面たる自己自身を見る眞の自己は見られない、唯不可知なる或物と考へられるまである、強いて之を對象化すれば心理學者のいふ如く我といふのは無ならなければならぬ。それで具體的一般者の限定面が「於てあるもの」に屬し、その媒介面と考へられる如く、知的直觀の一般者の限定面が自己自身を見るものに屬し、その媒介面的性質を帯びたものが自覺的一般者として、之に於て所謂意識界といふものが限定せられる。之に反し、具體的一般者の中に包まれた抽象的一般者が自己限定作用を含まないと考へられる如く、知的直觀の一般者に於て無媒介的限定面と考へられるものが、單なる判斷的一般者と考へられるのである。それは單に所謂客觀的對象界を限定するものであり、之に於て所謂自然界といふ如きものが限定せられる、判斷作用といふのは見るものを除去した知的直觀である。無論、見るものがなくなると云ふのではない、見るものは自覺的一般者に於てはノエシス的なるものに萎縮し、判斷的一般者に於ては更にヒポケイメノンとして枯死するのである。而してそれの「意味に於て見る」といふ意義

を有すると考へることが出来る。上來、判斷的一般者から出立して知的直觀の一般者に至つたのであるが、逆に知的直觀の一般者から右の如く見ることが出来る、すべてを知的直觀の一般者の中に含めて、その限定と考へることが出来るのである。知識の世界といふのは知的直觀の一般者の抽象面的限定即ち知的叡智的自己の内容として成立するのである。

知的直觀の一般者に於ける知的叡智的自己の限定面といふのは、具體的一般者の自己限定面として之に含まれたる抽象的一般者に當るものである。抽象的一般者は具體的一般者の自己限定面として、種々なる位置を取ると考へることが出来る。先づ物の述語的統一面と考へることが出来るであらう、更に於てあるものゝ媒介面と考へることが出来るであらう、その極單に法則的ともなる。之に反し、單に自己限定作用を含まない無媒介的一般者として分類的知識を構成することも考へることが出来る。自覺的一般者といふのは知的直觀の一般者に於て之に於てあるものゝ述語的統一面の意味を有するものと考へることが出来る、ヒポケーメノンとしていつもノエシス的なるものが見られねばならぬ。かゝる媒介面的意味を進めてその極點に至れば、單に規範的法則面ともなる。之に反し、無媒介的なる抽象的一般者の意

味に於てはノエシスの限定の意義を失つて單なる客觀的對象界ともなる、所謂對象論理學はかゝる立場に立つて居るのである。是に於て自覺的一般者は判斷的一般者に萎縮するのである。無論、抽象的一般者は具體的一般者の自己限定面として知識構成の意義を有ち得るのである。客觀的對象界といへども、知的叡智的自己たる意識一般の自己限定面として考へ得るのである。併しそれは自己限定作用を含まない抽象的一般者の如くに、一般的自己の限定面たるに過ぎない。之に於てはもはや自覺的自己は成立せない、自覺的自己の代りに唯個物といふ如きものが見られるのみである。

眞の認識主觀ともいふべき知的叡智的自己の限定面といふのは二様の意味を有つて居る。知的直觀の一般者に於てある自己自身を見るものとしては、何處までも直觀の意義がなければならぬ、叡智的自己の内容を映すといふ意味がなければならぬ。併し自覺的自己を超越した自己の對象界としてはそれは何處までも構成的意義を有せなければならぬ。カントの意識一般は形式的とは云へ、かゝる兩面の意味を有つたものでなければならぬ。然るに單に之を構成的意義のみに考へれば、リツケルトの如くに單なる論理的主觀となり、直觀の意義は失はれなければならぬ、

カントが客觀的知識の條件とした直觀との結合を明にすることはできない。之に反し、フッサールの如く直觀の意義のみを取れば、對象界構成の意義は失はれて、單に自覺的一般者の意味を深めたものとなる。前に云つた如く自覺的限定とは述語面が述語面自身を限定すると云ふことである、限定される述語面が限定する述語面である、對象界が自己を限定し自己が對象界を限定する、此故に自覺である。自己が對象界を限定するといふ意味に於ては知的直觀の一般者の意味を有するのである。然るに自己其者を單に受働的にして無内容と考へ、對象界が自己を限定すると云ふだけの自覺的限定を考へるならば、かゝる自覺の自己限定面は表象的意識面として單に對象を映すと云ふ外に考へられない。併し自覺的自己の根柢に叡智的自己があるものとして、之を叡智的自己の立場から見れば、映すといふことの根柢に見ると云ふことがなければならぬ、映すといふことは見るものなくして見ることである。現象學はかゝる立場の上に立つものである、現象學の立場は表象的自己の立場を叡智的自己の立場にまで押し進めたものである。かゝる立場の上に立つものとして現象學は一種の一般妥當性を要求し得るでもあらう、現象的純粹自己はノエシス的には超越的でなければならぬ。かゝる立場に於て見られる叡智的自己の立場に

於て見られたものが本質である。對象界を限定するといふことは述語面が述語面自身を限定すると云ふことであつて、かゝる意味に於て限定せられた自己の超越的意識面に映されるものは判斷的一般者の述語面的限定の質料となるであらう、併しその構成的意義を缺くが故に、何處までも客觀的知識とはならない、本質とはいつてもかゝる性質を有つたものである。無論、現象學の方では作用の上に作用を加へて範疇的直觀の如きものにも至ると云ふでもあらう。かゝる場合、作用其者の内容が入つて來るのであらう、自己が對象界を限定するといふ自覺的限定の意味が入つて來なければならぬ。併し現象學者はかゝる意識内容をも對象面的に限定せられた自己の内容として見て居ると思ふ、映す意識の立場から見て居るのである。意識の映すといふことの根柢には叡智的自己が自己の内容を見ることがあるのであるから、かゝる立場も何處までも深め行くことができるであらう、併し遂に叡智的自己の構成的立場に至ることはできない。

現象學の立場は何處までも表象的意識の立場を進めたものでなければならぬ、従つて本質といふ如きものは單に記述せらるべきものであつて、カント哲學の對象とは異なつたものである。客觀的對象と考へられるものは構成的自己の内容でなければならぬ、*quid facti* から *quid iuris* へは越ゆべからざる間隙がある。 *Bedeutungserfüllung*, *Kategoriale Anschauung* をかゝつても、述の立場を出ることはできぬ、若し之によつて客觀的對象に達するを云ふなら、現象學は自己自身の立場を棄てなければならぬ。

## 五

客觀的知識成立の根柢には自己自身を見るものがなければならぬ、眞理とは知的直觀の一般者に於てある叡智的自己の自覺的内容に外ならない。知的直觀の一般者の自己限定面は我々の意識的自己に對して二様の關係を有つて居る。意識的自己を超越した超越的自己の自己限定面として客觀的對象界と考へられると共に、(自己が對象面的に限定せられるかぎり意識的自己が見られるのであつて)自己が自己自身の對象界を限定するといふ自覺的限定の意味に於ては、客觀的對象界は自己自身の限定面でなければならぬ。自己が自己自身を限定するといふ自覺的自己の奥底に於て、逆に對象面的に限定せられることを越えた時、客觀的對象界は自己自身の限定面となるのである。無論、自己が自己の對象界を限定するといふ自覺的限定の意味は何處までも深く進むことができるであらう。併し客觀的知識といふのは意識的自己をその超越的方向に進めてその極限點に於ける自己の内容として見られるのである。更に之を越ゆれば創造的自己の内容としてもはや知識的に限定することはできない。述語面が述語面自身を限定すると云ひ得るかぎり、意識的自

己が考へられるのである。逆に自己が意識的に自己を限定するかぎり述語面が限定せられる。而して述語面が述語面として限定せられるかぎり、之に於て判断的知識が成立するのであるが、かゝる限定を越ゆれば、もはや判断的知識といふものは成立せない。判断的知識が右の如くにして成立するものとするならば、最初に問題とした直覺的知識といふ如きものは如何にして成立するのであらうか。

我々の客觀的對象界と考へるものが叡智的自己の自己限定面として成立するといふ立場より見れば、すべての客觀的知識は自己自身を見るものゝ内容として直覺的と云ふことができる。併し叡智的自己といふのは何處までも意識的自己を越えたものである。自覺的一般者の限定の中に入り來らざるものである。かういふ意味に於ては、客觀的對象界は我々の意識的自己に内在的とは云はれない、我々は之について直覺的知識を有つと云ふことはできぬ。唯、自覺的一般者が知的直觀の一般者に於てあり、自覺的限定が叡智的自己の自己限定と考へられるかぎり、直覺的知識が成立するのである。

知的直觀の一般者の立場から見れば、自覺的一般者の内容と考へられるものはその抽象的限定面に映されたる叡智的自己の内容に外ならない。意識的自己の底に

は睿智的自己があるのである。睿智的自己の立場に於て意識的自己を超越すると云ふのは、抽象的自覺から具體的自覺の立場に至ることである、自己自身の影を見るものから自己自身を見るものに至ることである。意識一般の立場といふも自己がなくなるのではない、知られた自己から眞に知る自己となるのである。かういふ見方よりすれば、一般者の自己限定といふのはすべてが自覺的限定であつて、その背後に自己自身を見るものがあるとき考へることができ、判斷的一般者のみならず抽象的一般者の背後にもかゝるものを考へることができ、唯その場合自己が益抽象化せられて行くのである、所謂自覺的一般者の限定よりも更に抽象的となるのである。

述語面が述語面自身を限定するのが自覺的限定である、斯く自己自身を限定する述語面は自覺的一般者に於て對象界として自己自身を限定すると考へられると共に、自己の意識面として自己によつて限定せられるとき考へられる。即ち自己の自己限定面と考へられるのである。判斷的一般者に於て主語的とき考へられたものは、もはや此面に於て成立せない、その底に超越してその背後から之を限定して居るものとなる、それが自己と考へられるものである。自己は何處までも意識面に現れるも



のではない、唯之に於てその影を映して居るのみである。かゝる意識面的限定が意識の表象性と考へられるのである、之に於てあるものはノエシス的としていつでも何物かを志向するのである、志向せられるものは背後から限定して居る自己の内容に過ぎない。此の如き自覺的一般者の自己限定面としての意識面即對象面の意味は何處までも廣げて行くことができるであらう。對象面的方向に於ては、對象界其者に接すると考へることができ、自己の限定面として自己を映すと云ふ方向に於ては、働く自己其者に接するとまで考へることもできるであらう。後者がノエシス的方向であり前者がノエマ的方向と考へられるものである、現象學的立場は斯くして考へられるのである、此故に表象的意識の立場を超越的自己の立場にまで進めたものである。併し自覺的限定といふのは單に述語面が述語面自身を限定すると云ふことによつて考へられるのではない、かゝる見方は判斷的一般者からの見方に過ぎない、自覺の根柢には自己自身を見るものがなければならぬ。表象的自己意識の超越は睿智的自己が自己自身を見る自己限定の一面面としてのみ考へ得るのである。自己の對象界を自己の限定面となすといふ構成的自己の内容は此中に入つて來ない。現象學的立場からは對象認識の立場には違ふことはできないのは此故であ

る。之に反し、單に構成的自己の一方面のみを考へれば、自己の内容を映すといふ表象的意識の方面は失はれなければならない、従つて知識は無内容となるの外はない。併し叡智的自己の内容として客觀的知識といふものが構成せられるかぎり、何處まで構成的方向に進んでも表象的方面がなければならぬ。叡智的自己といふのは自覺的自己を超越的立場に進めたものである、表象的意識面を含むことによつて自己と考へられるのである。判斷的一般者といへども、之に於て客觀的知識が限定せられると考へられるかぎり、叡智的自己の自己限定面として意識面と考へられるものがなければならぬ。それはもはや之によつて自己が限定せられ、逆に自己が之を限定するといふ自覺の意義を失つた如きものであるかも知れない、單に一般的なる抽象的自己の限定面と考へられるものかも知れない。併しかゝる意味に於ける意識面といふものが考へられない以上、叡智的自己の内容として客觀的知識が成立するとは云はれない。判斷的一般者の背後にも自己自身を見るものがあると云つた所以である。故に客觀的知識成立の根柢にはいつでも直覺がなければならぬ。叡智的自己が自己自身の内容を映すかぎり、客觀的知識が成立するのである。

自覺的一般者の自己限定面はいつでも兩様の意味を有つ、自己は自己の意識面即

對象界を限定するといふ意味を有つと共に、意識面即對象界から限定せられるといふ意味を有つて居る。かゝる對立的自己の立場を超越することによつて、限定する自己が直に限定せられる自己であり、限定せられる自己が直に限定する自己である自己自身を見るものに至るのである。併し之を意識的自己の立場から見れば、兩方向への超越的自己が考へられる。意識面が自己の内容を映すと云ふ方向を超越的立場にまで進めたものが現象學的自己であつて、かゝる立場に於て映される睿智的自己の内容が本質と考へられるものである。それは自己自身を限定する述語面として判斷的一般者への傾向を有つてもあらう、併しそれは睿智的自己其者の自己限定として客觀的認識を構成するものではない。之に反し、睿智的自己其者の自己限定を現すものは判斷的一般者である、具體的一般者が自己自身の中に自己限定作用を含み、自己自身の内に自己自身を限定すると云ふのは、睿智的自己の構成的方面を意味するものである。上に云つた如く、判斷作用とは知的直觀の限定から見るもの内容を除去したものである。かういふ立場から見れば、判斷的一般者自身が何處までも限定すべからざるものとして單に限定するものとなり、限定作用が於てあるものに移り、於てあるものが自己自身を限定し媒介するものとなること云ふことは、判

斷的一般者が自己自身を見るもの、方向へ深まることを意味するのである。之に反し、自己限定作用を含まない抽象的一般者と考へられるものは、之より遠ざかつたものである。判断的一般者は單に知的直觀の一般者の抽象的なるものとして意識面を有たないのではない、唯自覺的意識に達せないまでである。叡智的自己が自身を映すと云ふに至らないまでである。判断的一般者に於て働くものといふ如きものが考へられる場合、其裏面に既に自覺的意識が含まれて居なければならぬ。抽象的一般者といへども、之に於て分類的知識といふ如きものが構成せられる時、その背後に一種の意識面が潜在して居なければならぬ。唯その意識面は自覺的意識に至らないものである。此故にかゝる一般者は自己自身の中に自己限定作用を含まないと考へられる。述語面が述語面自身を限定すると云ふことによつて自覺的となるが、抽象的一般者といふ如きものは未だ述語面が述語面自身を限定すると云ひ得ざるものである。かゝる自覺的限定に於ては、未だその意識面の二重の意味といふのが現れない、自己は對象面的に限定せられて居るのである。自覺的意識に於て一方に述語面が述語面自身を限定すると考へられると共に、叡智的自己が自己自身を見るといふ叡智的自己其者の立場が映されるのである。カントの意識一般の

如きものに至つて、始めてそれが自覺的自己であると共に、對象面的限定を脱して、直に判斷的一般者を限定する叡智的自己其者に達するのである。

叡智的自己の自己限定は自覺的自己と考へられるものに對して構成的でなければならぬ。併し叡智的自己とは元來自己自身を見るものである。叡智的自己に於ては見る事が構成することであり、構成することが見ることでなければならぬ。叡智的自己が自己自身を見ることによつて、客觀的知識が構成せられるのである。かゝる意味に於ける見るといふ方面を表すものが我々の自覺的限定と考へるものである。我々の意識面と考へるものは叡智的自己の内容を映すものである。かゝる映すといふ意識面的意味を超越的立場にまで進めたものが現象學的立場である。嚴密にかういふ立場を守るならば、意識は何處までも志向的といふの外はない、本質直觀といふ如きことも疑問である。本質直觀といふ如きことも叡智的自己が自己自身を見ることによつて可能となるのではなからうか。本質といふ如きものも一種の叡智的自己の内容と考へ得るであらう。唯それは自己の構成的方面を含まないが故に未だ眞に自己自身を見るものゝ内容としてイデヤとは云はれない、何處までも主觀性を脱することはできないのである。眞に叡智的自己其者の内容に達する

には、單に表象的自己を越ゆるのみならず、働く自己を越えなければならぬ。現象學的直觀も自己自身を見る叡智的自己の一面として對象をその極限に望むことができらざらう。併し現象學的自己の立場からしては、何處までも眞の超越的對象に達することはできない、作用を綜合統一して行つても記述の立場を出づることはいふべきでない。現象學的立場は叡智的自己の映すといふ立場なるが故に、映すといふ意味を超越的立場にまで進めることによつて、作用的なるものも映されて來るであらう。併しそれは何處までも映された作用であつて構成作用ではない、限定せられた意識面に屬するものであつて意識面を限定する自己に屬するものではない。眞の超越的對象は構成的自己其者の内容でなければならぬ。意識の根柢を自覺に置くならば構成することが眞に意識することである、單に映す意識といふのは限定せられた意識意識せられた意識に過ぎない。所謂本質は自己自身を構成するものでないイデアの影に過ぎない。眞の叡智的自己の立場に至るには如何なる意味に於ても限定せられた自己を越えなければならぬ。現象學的純粹自己といふのは所謂限定せられた自己を映すといふ意味に於て、何處までも映された自己を越えたものではない、従つて作用的であるが、それ自身はかゝる自己の極限にまで進めたものに過ぎない。

なるものを映すと云つた作用の足跡を映すに過ぎないのである。

自覺的一般者の自己限定面が二重の意味を有つと云つたが、知的直觀の一般者に於てあるものがその抽象面に於て自己自身を限定すると考へられる時、その限定面は二重の意味を有ち、之に於てあるものはすべて兩方向を有つと云ふことができる。知的直觀の一般者の限定といへども、それが一般者の限定と考へられるかぎり、斯く云はねばならぬのである。すべて一般者の自己限定面に於てあるものは兩方向を有つ、判斷的一般者の限定面に於てあるものは主語と述語との對立をなす、自覺的一般者の限定面に於てあるものはノエマとノエシスとの對立を成すのである。判斷的一般者から見れば、主語と述語との兩方向に超越して行くことによつて、知的直觀の一般者に至ると考へられるが、逆に知的直觀の一般者から見れば、知的直觀の一般者がすべてを含みすべてを限定するものとして、主語と述語との對立も知的直觀の一般者の限定面に於ける對立によつて基礎附けられて居ると考へることができる。自覺的一般者に於ける對立も同様に考へ得るであらう。知的直觀の一般者の抽象的自己限定面と考へられる意識一般の意識面ともいふべきものは相反する兩方向を有し、兩方向に傾き得るものと考へることができ。そのノエマ的方向に傾いた

ものが判斷的一般者と考へられ、そのノエシスの方向に傾いたものが自覺的一般者と考へられる。判斷的一般者に於ては、その限定面は更に抽象的一般者にまで萎縮すると考へることが出来る。判斷的一般者の自己限定が深くなるといふことは自覺的一般者の方向に進むことであつて、即ちそのノエシスの自覺面を得て知的直觀の一般者の限定面に近くことを意味するのである。之に反し、自覺的一般者に於ては更に單なる主觀的意識面といふ如きものが考へられるであらう、それに於て客觀的對象界が成立せないと考へられるものである。自覺的一般者の側に於て抽象的一般者に當るもの、即ち抽象的意識面と考へられるものは、所謂直覺的意識と考へられるものである。未だ自己の自覺に達せない受働的意識と考へられるものである。判斷的一般者の自己限定が判斷作用であり、判斷的一般者の自己限定が進むに従つて於てあるものが自己自身を限定すると考へられ、その極主語的なるものは述語面の底に超越するに至つて、述語面が述語面自身を限定するものとして自覺的一般者の限定と結合する。之に反し自覺的一般者は意識的に自己自身を限定するものであり、意識作用と考へられるものが自覺的一般者の自己限定作用でなければならぬ。之に於てあるものは意識作用的に互に自己自身を限定し媒介するのである、述語面



が述語面自身を限定するといふことは意識的に作用することである。それで自覺的一般者に於て自己自身の中に自己限定作用を含まない抽象的一般者と考へられるものは、作用せない意識、單に映す意識面といふ如きものでなければならぬ。判斷的一般者に於てあるものは、抽象的一般者に於て述語的に自己を限定する如く、自覺的一般者に於てあるものは、かゝる意識的抽象面に自己を映すことによつて、自己を限定するのである。かゝる意識面は自覺的一般者の限定面として主觀的意識面と考へられ之に於て自覺的意識を越えた叡智的自己の對象界といふべき客觀的知識の世界は成立せない。知的直觀の一般者の立場から見れば自覺的一般者の自己限定といふのが既にその構成的意義を離れて單に映すといふ方向に傾いたものであり、所謂直覺的意識と考へられるものは更にかゝる方向に傾いたものである、即ち自覺的限定の萎縮したものである。それは何處までも完全なる判斷的一般者の超越的述語面とはなり得ないものである。一方に於て、判斷的一般者に於ける抽象的一般者が自己自身を基礎附ける完全なる自覺面を有つことができぬ、従つて無媒介と考へられると同様である。

右の如く知的直觀の一般者の限定面が兩方向のいづれにも傾くことができ、更に

その兩方向に抽象面といふ如きものが考へられるのであるが、知的直觀の一般者其者の立場から云へば自覺的に自己自身を見るかぎり、客觀的知識が構成せられねばならぬ。直覺的意識面に於て見られる本質は直に抽象的一般者に於ける知識構成の基礎となるのである、逆に抽象的一般者の意識面といふのは直覺的意識面を意味すると云ふことができる。意識的に無媒介なる直覺的意識面と考へられるものが、判斷的に無媒介なる抽象的一般者を限定し、逆に後者が前者を限定するのである。元來、知的直觀の一般者に於てあるものが自己自身を限定する自己限定面といふのは二様の面が重り合つて居るのではない。自己自身を見るもの、自己限定面はいつでも主觀即客觀客觀即主觀でなければならぬ。唯、知的直觀の一般者の限定と考へられるものも、一般者の自己限定として、その抽象的限定面に於てあるものは、ノエシス的とノエマ的との兩方向を有つと考へられ、一方にノエシス的内容を極小として意識一般といふ如きものが考へられると共に、かゝるノエマ的限定を否定として自己自身の中に含むともいふべき逆の方向が考へられるのである。かゝる意味に於て知的直觀の一般者の限定面に於ても常に逆の方向が含まれて居る。かゝる逆の方向即ちノエシス的方向に於てノエマ的内容を極小としたものが、自覺的一般

者の自己限定といふ如きものとなるのである。(かゝる意味の叡智的ノエシスの限定が純粹現象學の立場といふ如きものであらう、知的直觀の限定作用に於てノエマ的なるもの、即ち超越的對象といふ如きものは現象學的立場へは入つて來ない)。斯く知的直觀の一般者の自己限定といふものがその兩極に於て相反する抽象面に分つことができ、一方に於て判斷的一般者といふ如きものが考へられ、一方に於て自覺的一般者といふ如きものが考へられるのであるが、知的直觀の一般者の自己限定面其者は元來自己自身を見るものゝ自己限定面として、之に於て限定せられるものは叡智的自己其者の内容なるが故に、意識一般の意識面に於て自己自身を見るものゝ統一相が見られねばならぬ。かゝる叡智的自己其者の直觀が一方に本質的なるものを見、一方に抽象的一般者を構成するのである。かゝる統一相は叡智的自己の自覺にまで至らないものとは云へ、やはり一つの叡智的自己の影像として、之によつて一つ的一般者が限定せられるのである。意識一般といふのは叡智的自己のノエシスの内容を極小としたものと云つても尙叡智的自己の自覺である、形式的とは云へ既に自己自身を見る叡智的自己其者である。かゝる叡智的自己の自覺にまで達せない叡智的自己の直觀とも云ふべきものが、所謂直覺的知識を構成するのである。

是故に直覺的知識は單に自覺的一般者の底に本質を見るといふことによつて直に成立するのではなく、自覺的一般者の底に本質を見るといふことが叡智的自己が自己自身を見るといふ意味を有し、客觀的知識を構成するといふ意義を有するかぎり、直覺的知識が成立するのである。單に自覺的一般者の映すといふ方面を超越的立場に進めて、本質的なるものが見られたとしても、それは直に直覺的知識とはならないのである。

判斷的一般者は自己の中に自己限定面として抽象的一般者を含み、その場所に於てあるものはかゝる限定面に於て自己自身を限定する。判斷的一般者に於てある最後のものは、自己自身を限定するものとして働きと考へられるであらう。併しその限定面即ち抽象的一般者から之を見れば、基體といふ如きものが考へられるであらう。自覺的一般者に於ても、その最後のものは意志と考へられるであらう。併しその限定面から之に於てあるものを見れば、意識的自己と考へられるであらう（情意的内容といふ如きものがかゝる自己の内容を現すものである）。知的直觀的一般者に於ても、之と同様に之に於てある最後のものは道徳的自己としてその内容はもはや見るこゝのできないものである。之をその限定面即ち意識一般の意識面といふ如きものから見れば、直觀的自己と考へられる（その内容が藝術的内容と考へられるものである）。かゝる直觀的自己の影像を所謂意識面に映じたものが直覺的意識面として、私の所謂叡智的自己の統一相と考へられるものである。故に直覺的意識面にはいつでも明證の感情 Evidenzgefühl が伴ふのである。明證の感情といふのは直觀的自己の影像を示すものであり、藝術的感情からその人格的内容を除去したものである。

嚮に知的叡智的自己即ち意識一般の自己其者の内容はベルグソンの純粹持續の如きものでなければならぬと云つた。此にこれについて一言して置かう。意識一般を形式的と考へれば、單に判斷的一般者といふ如きものとなるであらう。併し意識一般が

苟も知的睿智の自己とて睿智の世界に於て有るものと考へられる以上、それも直観の内容を有せなければならぬ。カントの意識一般さばかゝる内容を極小と考へたものである。併し内容の方面を極大として形式の方面を極小とすれば、ベルグソンの純粹持續の如きものとならねばならない（フツサールの如く單に映すといふ現象學的自己から見ればそれは單に *Hyphen* といふ如きものとさなるであらう）。併しベルグソンの純粹持續といふ如きものは睿智の自己其者の具體的内容さといふべき藝術的直観の内容と區別せなければならぬ。それは唯無限に到達することのできない直観である所謂意識面に於て自己の統一相を映すものではない。かゝる直観の内容はその底から見れば、睿智の自己の最後のものたる道德的自己によつて基礎附けられて居るものとも考へ得るであらう。無論、道德的自己の内容はもはや見られるものではない、唯法則としてノエマ的に限定せられるものでなければならぬ。併しかゝる無限に達することのできない直観の内容といふのは意志的睿智の自己の質料の意義を有するものである。故にかゝる内容を質料として藝術的直観の内容が形成せられ又道德的實在 *Stücklein* の内容といふ如きものが形成せられるのである。但し道德的自己の内容は見ることのできないものであるから、之を質料として形成せられたものは藝術品の如く形式と内容とが統一せられた具體的内容はない、何處までも未完成である單に形式化せられた内容に過ぎない。

## 六

此論文は最初、自己自身に於てあるものを知ること直覺と考へることから出立し、我に於てあると考へられるものは、判斷的一般者を越えて自覺的一般者に於てあるものであつて、自覺的一般者が自己自身を限定するといふことが知るといふことであること云つた。斯く考へれば、自覺的限定が直に直覺であるかの様にも考へられ

るが、眞に直覺すると云ふには、對象を内に包むと云ふことがなければならぬ、斯くして始めて自己自身に於てあるものを知ると云ふことができるのである。對象を内に包むと云ふには、知的直觀の一般者の立場に立たなければならぬ。知的直觀の一般者に於て自己自身を見るものにして、始めて對象を内に包み、自己自身に於てあるものを知るといふ意味に於て直覺すると云ふことができるのである。併し斯く云へば、すべての客觀的知識は直覺と云はなければならぬ。我々の客觀的知識と考へるものは、叡智的自己が自己自身の内容を見ると云ふことによつて成立するのである、眞理のイデアとは叡智的自己の内容に外ならない。知識は一般者が一般者自身を限定することによつて成立するのである。判斷的一般者について云へば、述語面が述語面自身を限定することによつて成立するのである。述語面が述語面自身を限定するといふことは、叡智的自己が自己自身を見ることである。前に之を自覺的限定と云つたが、之によつて客觀的知識が限定せられると云ふには、既に自覺的限定を越へて叡智的自己の限定に入つたものでなければならぬ。限定せられた述語面と考へられるものは、叡智的自己が自己自身の内容を映す自己限定面に外ならない。限定する述語面が知る自己であり、限定せられる述語面が知られた自己であ

る。判断的一般者の超越的述語面に於てあると考へられるものは見る自身の内容に外ならない。判断的一般者に於て、その超越的述語面に於てあるものは個物的なるものと考へられるが、眞に超越的述語面に於てあると云ふべきものは働きといふものであり、更に自覺的限定を通して之を見れば意識一般の範疇的限定として叡智的自己の内容と考へらるべきものである。

右の如く考へればすべて客觀的知識と考へるものは叡智的自己の直觀によつて成立すると云はねばならぬが、中に就いて我々が直覺的知識と考へるものは、そのノエシス的内容が自覺的一般者に於て限定せられるものでなければならぬ。無論、知的直觀の一般者に於て叡智的自己が自己自身の内容を限定すると云ふには、先づノエシスの限定がなければならぬ。自己自身を見るもの、ノエマ的内容が客觀的知識内容と考へられるのであるが、そのノエシス的内容が自覺的一般者に於て限定すべからざるものとなる時、その内容はもはや我々の意識的自己に内在的とは考へられない。自覺的一般者の限定とは如何なるものであるか。之を判断的一般者から云へば、述語面の底に超越するものを包む一般者として、述語面を限定する述語面と云ひ得るであらう。併し之を知的直觀の一般者の限定から云へば、そのノエシス的

限定と云ふことができる。知的叡智的自己のノエマ的限定が判断的一般者の限定と考へ得るならば、そのノエシスの限定が自覺的一般者の限定と考へ得るであらう。唯、自己自身を見るものに於て、ノエシス的なるものがノエマ的なるものを包むといふ意味に於て、自覺的一般者が判断的一般者を包むと考へることができるのである。眞に判断的一般者を包むといふには、知的直觀の一般者の立場に至らなければならぬ。自覺的一般者の限定面は常に二重の意味を有し、判断的一般者を限定すると共に、又之によつて限定せられるといふ意味を有つて居るのである。叡智的ノエシスがノエマ的に限定せられ得るかぎり、自覺的一般者の限定といふものが考へられるのである。斯く自覺的限定といふのはノエマ的限定を脱せないから、叡智的自己の限定に達せないものではあるが、叡智的自己は自覺的に自己を限定し、叡智的自己其者の限定は直接に自覺的一般者の限定において映されるが故に、自覺的一般者の限定其者の中に、叡智的自己其者の限定を映すことができる。かゝる限定が我々の意識に内在的と考へられると共に客觀的と考へられるのである、即ち我々の直覺的意識と考へるものである。自己自身を見るものはノエシス的に自己を限定するのである、ノエシス的なるものの中にはノエマ的なるものを含んで居る。唯、叡智的自己



のノエシスの限定が未だ眞の自己限定に至らないかぎり、即ち叡智的自覺に至らないかぎり、判斷的一般者を包むといふことはできない、即ち眞に客觀界を包むといふことはできぬ、我々の直覺的意識が主觀的と考へられる所以である。所謂意識一般に至つて始めて形式的とはいへ、叡智的自己が自己自身の限定に達するのである、叡智的自覺に至るのである、之に於て客觀界を自己の内容として直觀するといふことができるのである。併しそれは既に自覺的一般者の限定の外に出るが故に、超越的と考へられねばならない。

叡智的自己が自己自身の内容を見るときは、之を我々の概念的知識の立場から見れば、見るものなくして見ると云ふことである。見られたものは主もなく客もなきイデアの内容である、概念的知識の立場から見れば、所謂主客の對立を越えたものと云はねばならない。併し叡智的自己其者から云へば、自己自身を限定することによつて見られる自己の抽象的内容に過ぎない。叡智的ノエマとして叡智的ノエシスが之に對立するのである。知的直觀の一般者の抽象的限定面に於てあるものは、ノエマ的方向とノエシスの方に相對立するものでなければならぬ。イデアは主客の對立を超越して、實在界と考へるものゝ根柢となるが故に、概念的知識

の立場から之を見れば、イデアは無限に動くものである、創造的作用と考へられなければならない。此の如き知的直觀の一般者の限定面に於ける叡智的ノエマと叡智的ノエシスの對立に基いて、抽象的なる二つの一般者の限定が考へられる。一つはそのノエマ的限定を基としたものであり、一つはそのノエシス的限定を基としたものである。前者が私の判斷的一般者と名づくるものであり、後者が私の自覺的一般者と名づくるものである。而してノエマ的なるものはノエシス的なるもの、自覺的内容として、後者は前者よりも具體的と云ふことができる、私が自覺的一般者が判斷的一般者を包むと云ふ所以である。自覺的一般者の限定といふのは固叡智的ノエシスの限定なるが故に、之に於てあるものは叡智的自己其者の影像であり、その限定作用は意識作用と考へられねばならぬ、之に於てあるものは意識作用によつて自己自身を媒介するのである。意識作用といふのは知的直觀からイデア的内容を除き去したものである故に、イデア的内容を有つた對象界からは、逆に限定せられると云ふ意味を有つて居なければならぬ。之に反し、判斷的一般者の限定といふのは固叡智的ノエマの限定に基くものなるが故に之に於て自己の影像は見られない、自己は個物的なるものに萎縮するのである。判斷作用とは、上に云つた如く知的直觀か

ら見るものゝ内容を除去したものと云ふことができる。知的直観の一般者を一つの具體的一般者として見れば、叡智的ノエマを基とした限定面といふのは具體的一般者の抽象的限定面に當り、叡智的ノエマを基とした限定面と考へられるものは、同じ限定面が超越的述語面に於てあるものに屬するものとして、述語的統一面と考へられると同様である。具體的一般者の抽象的限定面は抽象的一般者として自己自身の限定作用を含まないと考へられる如く、叡智的ノエマを基とした判断的一般者に於ては、自己自身を限定するものゝ自己限定作用即ち所謂意識作用を含まない。而して抽象的一般者を本體として考へれば、アリストテレスの所謂第二本體といふ如きものとなる如く、叡智的ノエマを基として自己自身を見るものを考へれば、形式的な一般的な叡智的自己として意識一般といふ如きものを考へるの外はない。之に反して、同じく抽象的限定面であつても述語的統一面として考へれば、個物其者を現すことはできないが、個物的統一が映されねばならぬ。述語的統一面は個物的なもの判断的に自己自身を限定し、互に相媒介する媒介面と考へられるのである。それで私の自覺的一般者と考へるものに於ては、自己自身を見るものゝ統一相が映されなければならぬ、即ち人格的統一の影像が映されねばならないのである。而

して斯く自己自身を見るものゝ具體相が映されるかぎり、我々の直覺的知識と考へるものが成立するのである。自覺的一般者の底に見られる個物的統一は自己自身を見るものゝ自己限定として、之に於て客觀的對象が見られ、自覺的一般者の中に於て客觀的知識と考へられるものが成立するのである。自己の中に自己が見られるかぎり、直覺的知識が成立するのである。自覺といふものを判斷的一般者の述語面的超越によつて考へ、自覺的限定を述語面が述語面自身を限定すると考へれば、一般者が一般者自身を限定するといふことは自己が自己を限定すると云ふことであつて、かゝる限定の底には自己自身を見るものがあるのである。かく一般者が一般者自身を限定するといふ時、そこに直覺的知識が成立するのである。

## 七

知的直觀の一般者の自己限定面、即ち知的叡智的自己の自己限定面に於てあるものは、ノエマとノエシスとの兩方向を有し、知的叡智的自己の意識面は判斷的一般者と自覺的一般者と二つの抽象的限定面に分つことができる。併し自覺的一般者と云ふのはノエシスの限定なるが故に、自己其者を映し、自己其者を限定するといふ意

味を有つて居る。自己が之に於て限定せられると考へられるのである、我々の意識的自己と考へるものがそれである。之に於ては自己が對象面的に限定せられるのである、對象面的に限定せられると云ふことは、自己が叡智的世界に入らざるかぎり、叡智的ノエマの限定を免れないことを意味するのである。自己が全然意識的自己を超越して叡智的自己となつた時、即ち意識一般的自己となつた時、對象面的限定を超越して客觀的對象界を包むと云ふことができる、即ち自己自身を見るものとなるのである。併しそれに至る前に於ても、抽象面的とは云へ、苟もノエシスの限定である限り、自己自身を見ると云ふことがなければならぬ。元來知的直觀の一般者に於てあるものゝ全體について見れば、知的叡智的自己即ち意識一般的自己といふのは始めての自覺的自己と云ふべきものであるが、之を深くしては藝術的直觀の自己より、道德的自己に至り、之を淺くしては未だ叡智的自己の自覺に至らない自己といふものを考へることが出来る。叡智的世界といへども、概念的知識の立場から之を考へる以上、具體的一般者の自己限定として考へねばならない。具體的一般者は自己自身の場所に於てあるものゝ内容を自己の抽象的限定面に映すことによつて自己自身を限定する、かゝる抽象的限定面が抽象的一般者と考へられるものである。

併し逆に一般者が一般者自身を限定するといふ立場からは、抽象的一般者は自己自身の中に自己限定作用を含まない一般者と考へることができる。抽象的一般者は述語面的統一として具體的一般者の自己限定面と考へられると共に、逆に具體的一般者の無媒介的に萎縮したものととして、自己が無媒介的に自己自身に於てある一般者と考へることもできるであらう。知的直觀の一般者のノエシスの限定に基くところへられる自覺的一般者の限定をも右の如く考へることができる。自覺的一般者の自己限定作用といふのは、前に云つた如く意識作用と考へられるものである。自覺的自己と考へられるものは自己自身を限定するものとして、その超越的述語面に於てあるものである。併し自覺的一般者の自己限定面として考へられる所謂意識面を、自己自身の限定作用を含まない、即ち自覺的ならざる、無媒介なる自己と考へることができる。かゝる自己の自己限定面が所謂直覺的意識面と考へられるものである、自覺的一般者に於ける一種の有るもの即ち自己と考へることができる。而してそれは自覺的一般者に於てある睿智的自己のノエシスの限定に基くものとして、自己自身を見るものゝ影を映して居るのである。之に於て所謂客觀的知識が構成せられないとしても、それ自身の中に對象を含み自己自身を見ると考へることが

できる。直覺的知識を主觀的と考へるのは、所謂意識面を述語面的統一として自覺的一般者の抽象的限定面と見るに由るのである。之を具體的一般者の萎縮せる一つの抽象的一般者として見れば、かゝる叡智的ノエシスはそれ相應のノエマ的内容を含み、そこに一種の直觀が成立すると考へることができるのである。

右の如くにして私は自覺的一般者に於て一種の有るものが限定せられ、従つて一種の直覺的意識といふものが考へられると思ふ。自覺的一般者の抽象的限定面たる所謂意識面が單に無媒介なる一般者として一種の有と考へられる時、それは感覺的意識と考へられるものである。それは自己自身の限定作用を含まない、全く受働的な自己である、一般者が一般者自身を限定するとしても、能限定的方面の零と考へられたものである、作用の意識を含まないものである。之に反し、かゝる抽象的限定面が抽象的一般者が述語面的統一と考へられる如く、自覺的一般者の自己限定面と考へられた時、知覺的意識と考へられるのである。それは自己自身を限定する個人の自覺を包まないが、それ自身の中に一種の形成作用を含み、自己自身を限定する一般者として、一つの能働的自己と考ふべきものである。併し自覺的一般者の超越的場所に於てある個物的なるものとして自己自身を限定するものは、個人的自覺の意

識でなければならぬ、それが所謂内部知覺と考へられるものである。この立場から見れば、知覺的意識面も感覺的意識面も、かゝる自己の限定面として之に屬すると考へられるのである。以上の如く自覺的一般者に於て有るものとして自己が限定せられるかぎり、直覺的意識が成立するのである。而して自覺的一般者の限定は叡智的ノエシスの限定として、自己自身を見るときいふ意義を有するを以て、それ等の直覺的意識はそれ相應の叡智的ノエマを有し、一つの客觀界を限定し、廣義に於ける構成の意味を有つて居る。之に反し、表象的意識といふのは、叡智的ノエシスの限定といふ方向を抽象して、之を極限にまで押し進めたものである。全然叡智的内容を無にした叡智的ノエシスの限定といふものを考へた時、それは單に對象を映すと云ふ意味の外に有たない。ノエマ的限定から自由になるといふ意味に於て、それは自覺的一般者の限定を越えて叡智的自己の立場に入ると考へることでもできるであらう。併し之に於ては、有るものとして叡智的自己の統一相を見ることはできない、従つてかゝる立場からは對象的知識に到達することはできない、かゝる意味の意識に於て映されるものは、何處までも本質といふ如きものであつて、對象といふものではない。之を記述すると云ひ得るであらうが、之を限定するとか構成するとか云ふことはで



きない。無論右に擧げた直覺的意識と云つたものでも、カント哲學の如き意味に於て構成するとは云ひ得ないであらう。併し内部知覺は云ふまでもなく、知覺的直覺に於ても、之によつてそれ自身の連續を有つた一つの知覺的世界といふ如きものが限定せられるのである。感覺的意識といふ如きものに至つては最も非構成的と云ひ得るでもあらう。併し感覺的意識といへども單に表象的意識ではない、之に於て對象的なるものが映されるのである。本質的なるものと對象的なるものが内容上同じであつても、知識の性質上異なつたものでなければならぬ、本質的關係といふ如きものは直に客觀的知識ではない。感覺的意識はノエシス的として實在的なるものゝ内容を含んで居なければならぬ。自覺的一般者の限定を、單にノエマ的限定といふべき判斷的一般者の限定から區別し、又ノエマ的限定を包む知的直觀のノエシス的限定から區別して考へれば、自覺的一般者の限定に特有なるものは單なるノエシス的限定といふことであつて、かゝる意味に於ては、表象性といふことがすべての意識の通有性として意識の根本的性質といふことができるであらう、意識に於てあるものはすべてが志向的と云ひ得るであらう。かゝる現象學的立場は意識其者の立場に立つものとしては徹底的と云ひ得るであらう。併しかゝる立場から

は自己其者、或は作用的自己といふものは映されないと共に、對象を含んだ直観といふ如きものは考へられない。

睿智的自己のノエシスの限定として、自覺的一般者に於て睿智的自己の統一相が映される時、それが我々の意識面と考へられ、之に於てあるものは我々の意識に内在的と考へられると共に、一つの客觀界を限定すると考へられねばならぬ。併しかゝる自己は睿智的ノエマの限定を脱することはできない。かゝる限定を脱して客觀界を包むと云ふには、意識的自己を超越して自己自身を見る睿智的自己の立場に到らねばならぬ、即ち睿智的自己の自覺に達せなければならぬ。此の如きものがカントの所謂意識一般の立場である、睿智的ノエマを自己自身の内容として之を見ること云ひ得るが故に、客觀的對象界を限定し之を構成すると云ひ得ると共に、意識的自己として自覺的一般者に於ては限定すべからざるものとなる、即ち超越的主觀と云ふべきものである。すべて一般者が自己自身を限定するものとしてその限定が進むといふことは、その限定が於てあるものに移ることであり、自覺的一般者が自己自身を限定するものとして、睿智的自己其者の限定の方向に進むといふことは、之に於てあるものが自己自身を限定するものとして自覺的となることであり、即ち個人的

意識の自覺に達することである。我々が意識的自己を超越して叡智的自己に到るといふのは、個人的意識の底に超越することである。個人的自覺の底に尙一步を進んで叡智的自己の立場に入つた時、我々は始めて事實の世界を見る、事實的眞理といふのはかゝる立場に於て成立するのである。かゝる自己の立場は意識的自己からは客觀的自己の立場と考へられ、かゝる自己のノエマ的内容として見られるものは、もはや意識的自己に於て内在的とは考へられない。個人的自覺の意識といふのは、叡智的自己の自覺に接着するものなるが故に、所謂内部知覺に於て事實的知識といふ如きものが成立するであらう。併しそれは何處までも自覺的一般者に於て限定せられた自己の直覺的意識に屬するものとして、主觀的たるを免れない。かゝる限定を破つて一步を進めた時、内部知覺の事實はその儘に客觀的事實となる、經驗的科學は之に基いて成立するのである。元來、事實の知識といふのは、自己が自己の底を見ることのできない場合に成立するのである、無限に到達することのできない奥底に自己を見る直覺によつて成立するのである、自己自身を限定することのできない自己限定によつて成立するのである。一般者が自己自身を限定するに當つて、その限定が於てあるものに移り、その底に超越して更に之を包む一般者に於てあると考

へられる時、前の一般者から見れば無限に限定することのできない具體的個物と考へられると共に、之を包む一般者の立場から見れば、單に包まれた一般者の超越によつて考へられた抽象的一般者に過ぎない、無内容なる形式的有である。意識一般と個人的意識の自覺とはかゝる關係に立つものである。個人的意識の事實としては、具體的自己の内容たるものが、叡智的自己の立場からは無内容なる形式的自己の内容に外ならない。個人的自覺の内部知覺に於ても、もはや本質といふ如きものは見られない、見られるものは既に事實的なるものでなければならぬ、Sache ではなく Tatsache である。併しそれが叡智的自己の立場に於て、その内容として形成せられることによつて、客觀的事實となる。事實的内容を見る自己は主觀的にも、客觀的にも、ノエマ的に自己自身の内容を限定して見ることのできない動的自己である、意識的自己と叡智的自己との接觸點である。叡智的自己の内容は我々の意識的自己に對しては、先づ客觀的事實として與へられなければならない。客觀的事實性といふのが知的直觀の一般者に於けるノエマ的限定の特徴である、叡智的ノエマの特徴である。叡智的自己其者の具體的内容と考へられる藝術的内容とか、道德的内容とかいふものも客觀的事實の形に於て現れなければならない。事實的なるものゝ奥に、

我々は美の内容、善の内容を見るのである。我々が客觀的事實と考へるものは形式的なる知的叡智的自己の直觀の内容に過ぎないのである。

## 八

自覺的一般者の自己限定といふのが、知的直觀の一般者のノエシスの限定に基く抽象面的限定であるとするれば、判斷的一般者の限定といふのは、そのノエマ的限定に基く抽象面的限定といふことができる。知的直觀の一般者の單なるノエマ的限定といふのは、我々の個人的自覺の底に超越することによつて考へられる、所謂意識一般の限定に外ならない。我々が自己を超越して意識一般の立場に入ると云つても、我々の自己がなくなるのではない、意識的自己を超越して叡智的自己となるのである。唯それが自覺の一般者に於てあるといふ意識的自己の意義を脱すると共に、叡智的自己としては單に形式的有として、叡智的自己のノエシスの内容を有せざるが故に、知的直觀の一般者に於ける單なるノエマ的限定と考へられるのである。かゝるノエマ的限定を抽象的に考へたものが、判斷的一般者の限定となる。判斷的一般者といふのはノエシスの内容を極小とした自己自身を見るものである。無反省な

る叡智的自己である。カントの意識一般といふのは尙叡智的ノエシスの意義が無視せられて居ない。カントは直覺との結合といふことを認識主觀の條件として居る。更に此點を無視すれば單なる判斷的一般者の立場となる。對象論理學といふのはかゝる立場の上に立つものである。認識主觀といふ名のみにして實なきものとなるの外ない。

判斷的一般者が具體的一般者として、之に於て客觀的知識が限定せられると云ふには、それが叡智的自己のノエマ的限定の意味を有たねばならない、斯くしてその内容が我々の意識的自己に對して客觀性を有するのである。具體的一般者と考へられるものは、自己の中に自己限定作用を含み、自己に於て自己の内容を限定するものである。判斷的一般者の超越的述語面、即ち於てあるものゝ場所と考へられるものは叡智的自己のノエシスの限定面を意味するに外ならない、それは自己自身を限定する一般者其者として、判斷的限定にその内容を與へる直覺面と考へられるものである。かゝる所與面なくしては具體的一般者といふものは考へられない。苟も客觀的意義を有するものならば、それが分類的知識の如きものであつても、その背後に叡智的ノエシスの限定がなければならぬ。前に云つた如く、意識一般の立場に達

せない知覺とか感覺とかいふ如きものであつても、直覺的意識として叡智的自己の自己限定の意義を有するが故に、かゝる叡智的自己のノエシスの限定面が自己自身を限定する一般者として、抽象的一般者の場所となるのである。抽象的一般者によつて構成せられる非實在的知識は之によつて與へられるのである。全然ノエシスの限定を離れたノエマ的限定といふ如きものは、何等の知識をも構成せない、無意義なる形式となるの外はない。ノエマ的限定を無視して、叡智的ノエシスの抽象的限定面の立場を何處までも押し進めて行けば、單に志向的としてノエマ的なるものはすべて意味と云ふ如きものとならなければならぬ。之に反し、單にノエマ的限定の立場に立てば、單なる意味を内容とした形式論理の如きものとなるの外はない(かゝる意味の世界といふ如きものに就いては之を後日に譲つて今此論には入らない)。要するに、我々が判斷的具體的一般者と考へるものは、ノエシスの限定を潜在的とした叡智的自己なるが故に、具體的一般者が自己自身の中に自己自身を限定するといふことは、知的直觀の一般者がノエマ面的に自己自身の中に自己自身を見るものを限定すると云ふことであり、判斷作用といふのは叡智的自己の直觀からそのノエシスの内容を除去したものであり、判斷的一般者に於てあるものゝ根柢には自己自身

を見るものがなければならぬ。判斷的一般者の構造及びその種々なる限定は、知的直觀の一般者からそのノエシスの限定を除去したものとて理解せねばならない。抽象的一般者の限定といふのは、更にかゝる限定の退化したものと考へることができらるであらう、即ち未だ自覺に達せない叡智的自己のノエマ的限定面として、無媒介なる判斷的一般者と考へることができるのである。一つの客觀的對象界といふものが限定せられるには、その根柢に自己自身を見るものゝ自己限定がなければならぬ、之によつて一般者が一般者自身を限定すると云ふことができ、一つの客觀的對象界が限定せられるのである。ラスクの Gebiet とかフツサールの Region とかいふ如きものは、兩者その意味を異にせるにもせよ、いづれもかゝる限定に基くものでなければならぬ。前者はそのノエマ的側面を見、後者はそのノエシスの側面を見たものであらう。種々なる Gebiet 種々なる Region は自己自身を見るものゝ自己限定によつて定められるのである。

すべて客觀的知識と考へられるものは、知的直觀の一般者の自己限定に基く、かゝる意味に於てはすべての客觀的知識は直觀的と云ひ得るであらう。自己が自己に於てあるものを見るといふことなくして、客觀的知識といふものは成立しない。知



覺的知識とか感覺的知識とかいふ如きものであつても、それ等が何等かの對象的知識の意義を有するかぎり、その根柢に叡智的ノエシスの限定がなければならず、客觀的事實の知識といへども、知的叡智的自己に於ては內在的と云ふことができる。それでは所謂經驗的知識と先驗的知識との區別は何處から起つて來るのであらうか。客觀的事實の知識といふのは、上に云つた如く我々の自己が個人的自覺の奥底に超越して叡智的自己の立場に立つことによつて成立するのであり、知的叡智的自己の内容である。個人的自覺といふのは、之を自覺的一般的の自己限定としてはその最後の有であり、之を知的直觀の一般者から見ればその最初の有である、自覺的一般者が知的直觀の一般者によつて裏附けられることによつて見られるものである。故に内部知覺は直覺にして而も無限に到達することのできない直覺である、知的叡智的自己と個人的自覺とは相表裏するものと云ふことができる。知的叡智的自己の立場は既に知的直觀の一般者に入つたものとして、之に於て客觀的事實の世界が成立する、即ち所謂經驗界が成立する。かゝる世界は我々の意識的自己から見て超越的自己によつて構成せられるものとして外界と考へられるのである。かゝる世界の知識が經驗的知識と考へられるものである。之に反し、自覺的一般者に於てある

最後のものとして、個人的自覺は感覺的意識面や知覺的意識面と同性質の直覺的意識面にして、唯無限に到達することのできない直覺面と考へることができる。自覺の一般者の限定を睿智的ノエシスの抽象面的限定と考へるならば、之に於て睿智的自己の統一相が映されるかぎり、自覺的一般者に於てあるものが限定せられるのである。自覺的一般者に於て有と考へられるものは、皆それ〴〵直覺的意識面と考へられるものでなければならぬ。直覺面と考へられるものが判斷的一般者に於て物と考へられる如く、自覺的一般者に於て自己と考へられるものである(意識的有の根柢には必ず一種の感官がなければならぬ)。感覺的直覺面といふ如きものでも、抽象的一般者が無媒介的なる一つの一般者として第二の本體といふ如きものと考へられる如く、無媒介的なる自己と考へることができぬ。知覺的直覺面といふのは述語的統一面の如く媒介作用を潜在的に含んだ一種の自己と考へることができぬ。抽象的一般者は具體的一般者に於てあるものゝ自己限定面と考へられると共に、それ自身に於て媒介作用を潜在的に含んだ一つの一般者と考へることができぬ。我々が意識作用と考へるものは、元來右の如き意識的有としての直覺面の自己媒介作用に外ならない。働くものとは判斷的一般者の底に超越した主語的なるもので

あり、かゝる立場から判断的一般者の内容はすべて働きと考へられる。併しかゝる働くものが考へられるには、その根柢に叡智的自己の限定がなければならぬ。而して判断的一般者の限定として働きの世界といふのは叡智的自己のノエマ的限定と考へられると共に、いつもノエシスがノエマを包むのであるから、判断的一般者の底に超越すると云ふことは、先づ自覺的一般者に於てあることを意味し、自覺的一般者に於て有として叡智的自己を映すものが働くのを包むと考へられねばならぬ。何となれば、主語的なるものが述語面の底に超越する時、判断的一般者から見れば、述語面が述語面自身を限定すると考へられ、意識面といふのは判断的一般者の超越的述語面として主語的なるものが之に陥ち込むと考へられる故である。それで意識面が叡智的自己を映し意識的有として自己自身を限定すると考へられるかぎり、それは働くものを包み、作用するものと考へられるのである。而して判断的一般者の超越的述語面と考へられるものは、自覺的一般者に於ては對象面と考へられるものであり、意識的有と考へられるものは自己自身の對象面を限定するものである。これが意識作用の意味である。かゝる意味に於て感覺的直覺面といふ如きものは、無媒介的として最も受働的と考へられるものである。併し自覺的一般者に於てあるも

の、意味が深くなるに従つて、直覺面と考へられるものが自己自身を限定するものとなり、自己の對象界を限定するものとなる。その極、個人的自覺に於て知的叡智的自己に接する點に於て、その直覺面は無限に達すべからざるものとなり、自己は單に自己自身を限定し媒介するものとなる、かゝる作用が思惟作用と考へられるものである。直覺面は無限に達すべからざるものとなるが故に、自覺的自己の形式的直覺と考へられ、而も尙自覺的自己の限定に屬するが故に、内在的と考へられねばならない。自覺的一般者の自己限定の極限に於て、自覺的一般者の場所其者の直接なる限定とも考ふべきものである。直覺面が無限に達すべからざるものとして、形式的と考へられると共に、それは思惟作用として自己自身の作用的直覺とも考へられ、かゝる直覺を内容とする知識は、思惟作用其者によつて構成せられたものとして先驗的と考へられるのである。數學的知識は此の如きものと考へることができらるであらう。現今の數學的直覺論者の算數的原始直覺 *arithmetische Urintuition* といふものは此の如き自覺的一般者の形式的直覺でなければならぬ。

自覺的一般者に於て有るものとして直覺面と考へられるものは、すべて叡智的自己の影像として構成的方面を有つ。かゝる構成的方面が意識的有即ち所謂自己の

自己限定作用として意識作用と考へられるものである。かゝる直覺面はそれ相應の意味に於て判斷的一般者を包むと云ひ得る。主語的なるものが判斷的一般者の述語面の底に超越すると云ふ時、かゝる一般者の限定が客觀性を有つには、その主語的なるものが深く叡智的世界に於て、あるものでなければならぬ。而してそれが叡智的世界に於てあるものとなるには、先づ自覺的一般者によつて包まれなければならぬ。叡智的自己のノエマ的限定面として判斷的一般者が客觀的對象界と考へられ、對象界が自己を限定し自己が對象界を限定すると云ふことによつて、意識界が成立するのである。併し直覺的意識に於ては、上に云つた如く意識的自己が自己自身の對象界を限定すると云ふことができる。かゝる意味に於てそれ相應の判斷的一般者を包むと云ふことができるのである。感覺的直覺面といふ如きものは、かゝる意味に於て最も非構成的なるものと考へられるが、個人的自覺の直覺面は云ふまでもなく、知覺的直覺面であつても、かゝる意味に於て構成的と云ひ得るであらう。自覺的一般者に於ける直覺面のかゝる構成的方面が一つの對象界を限定するものとして、形式的直覺と考へられるものである。直覺面の映すといふ方面に於て知識の内容と考へられるものが與へられ、その構成的方面に於て形式的知識といふもの

が成立するのである。單に映すと考へられる感覺的直覺に於ては、かゝる形式的直覺といふものはないが、自覺的一般者に於てあるものゝ媒介面と考ふべき知覺的直覺に於ては、既に構成的としてかゝる意味の形式的直覺がなければならぬ。私はかかる直覺が幾何學的直覺として幾何學的知識の基礎となるものと考へるのである。自覺的一般者に於てある最後のものと云ふべき自覺的なるものゝ形式的直覺に於て數學的直覺といふものが成立するとするならば、その媒介面と考ふべき知覺面の形式的直覺によつて幾何學的知識が成立するのである。而して數學的直覺面は幾何學的直覺面よりも一層深きものとして前者は後者を包み、幾何學的なるものは數學的なるものの特種なる限定と考へることができるのである。すべての直覺的内容の如く數學的直覺の内容の如きも、判斷的一般者の超越的述語面に於て興へられるものとして、推論式的一般者の形に於て大語面的に限定し得られるかぎり、數學的直覺論者の所謂 *esetzmassige Wahrhoge* といふ如きものが成立すると考へることができるのであらう。(附録二)

右に云つた如く、數の世界といふのは自覺的一般者に於てある最後のものたる個人的自覺の直覺面的限定によつて成立すると考へることができ、それは何處ま

でも自覺的一般者に於ける直覺面的限定として、知的直觀の一般者其者の自覺的限定に入つたものではない、唯自覺的一般者の構成的限定の極限と考ふべきものである。此故に數學的知識は先驗的と考へられる。意識一般の立場即ち知的睿智的自己の立場に入るには、更に此立場を越えなければならぬ。自覺的自己を越えるとは何を意味するか。自覺的限定といふのは睿智的自己のノエシスの限定として、その直覺面的限定の形に於て睿智的自己の統一相を映すと共に、何處までもその抽象面的限定として、單に睿智的自己の抽象的内容を映して居るに過ぎない。此故に自覺的限定に於てはいつでも形式と質料と對立するのである。かゝる對立を越えて形式と質料とが合一した時、我々は始めて睿智的自己其者の立場に立つのである。かゝる立場が所謂意識一般の立場である。かゝる立場に立つ自己の内容として客觀的知識といふものが成立し、それは我々の自覺的自己を超越した自己の内容として、經驗的と考へられるのである。如何なる形に於て、形式と質料とが合一して睿智的自己の立場に入ることができらうか。私は上に自覺的限定の極限に於て無限に達することのできない直覺面といふものを考へた。かゝる直覺面は自覺的

一般者の限定に於て何處までも達すべからざるものとして形式的である。かゝる

直覺面が内容を有つと考へられる時、それは既に此極限を越えて叡智的自己其者の立場に入ると考へねばならぬ。嚮に私は又全く非構成的にして單に映す直覺面と考へられるものを感覺的直覺面と云つた。無限に達することのできない自覺的直覺面が感覺的内容を有つと考へられた時、始めて單に映すと考へた感覺的自己が直に構成的自己として、始めて叡智的自己の形をなすのである。超越的内容を映すといふことゝ構成するといふことが、此に於て合一するのである。カントが知識の客觀性を形式と質料との合一に置いた所以である。斯くして構成せられた最始の世界が我々の物理的世界と考へるものである。自覺的限定の無限に達することのできない直覺面が性質的と考へられた時、力の概念が成立するのである。知識の形式に客觀性を與へると考へられる感覺的なるものは、心理學者の所謂精神的要素といふ如きものではなくして、叡智的自己の内容でなければならぬ。その深き奥底には藝術的直觀の如きものがなければならぬ、それは形式を含んだ具體的内容でなければならぬ。右の如くにして考へられる知的叡智的自己の立場から叡智的ノエシスの意味を除去して見れば、私がこれまで云つた判断的一般者の立場となる、而して叡智的自己のノエマ的限定とも考へられるのである。斯く知的叡智的自己即



ち意識一般の限定は客觀的對象界を限定するものとして又範疇的限定ともいふことができる。無限に達することのできない個人的自覺の奥底に性質的直覺面が見られた時、かゝる系列的限定が時の範疇となる。「於てあるもの」を包む一般者の場所、即ち一般者の外延と考へられるものに於ては、無數の個人的自覺といふものが考へられ、従つて無數の時の系列といふものが考へられるであらうが、かゝる自覺的自己の限定面即ち述語的統一面の限定が上に云つた如く知覺的直覺面の限定として空間的範疇と考へられるのである。(附録二)故に空間はいつも時を豫想して居る時からその過去と未來とへの方向を除去した現在の共同面といふ如きものが空間と考へることができ、逆に時は空間を無限の方向へ個別化したものと考へることもできるであらう。個別化の行先が主語となつて述語とならないと考へられた時、それが時となると考へることもできる。自覺的限定の底に無限に達することのできな

い直覺面として、逆にかゝる限定を含むと云ふべきものが本體と考へられるものである。此の如き直覺面の限定として時の系列は働きの系列となる。範疇といふのは自發的なる思惟の形式が直覺的所與の形式と結合することによつて成立すると云はんよりは、ノエマ<sup>マ</sup>的なる思惟の形式がノエシス<sup>ス</sup>的なる直覺の形式に含まれるこ

とによつて成立すると考へることができるのである。(附録三)。個人的自覺の奥底に於て叡智的自己に接する直覺面に於て見られたものが、判斷的一般者の超越的述語面に於て與へられたものとして、範疇的に構成せられた經驗的事實と考へることができ、それが推論式的一般者の内容となるのである。推論式的一般者と云つたものは主語的なるものが叡智的自己の直覺面に於て見られた場合の判斷的一般者に外ならない。小語面といふのは判斷的一般者の超越的述語面に映されたる叡智的自己の直覺面を意味するのである。大語面と考へられるものはかゝる叡智的自己の自己限定面であり、かゝる自己の内容が限定せられ得るかぎり、大語面的に限定せられ推論式的知識が成立するのである。而して小語面的内容が既に叡智的自己其者の内容である場合は、主觀的自己を超越する客觀的自己の内容として、歸納法的知識が成立するが、自覺の形式的直覺の内容として自己に内在的と考へられる場合は、數學の如き演釋法的知識が成立するのである。併し上に云つた如く數學的知識といへども、それが直覺的と考へられるかぎり、何處までも大語面に限定することのできないものでなければならぬ。

附録一 近來數學に於て Paradoxien der Mengenlehre といふのは、限定せられた一般者にあるものと、限定する一般者に於てあるものとの混同に基くものと思ふ。具體的一般者は自己自身の中に自己自身の限定面を有つ、數學的一般者に於てあるものがかゝる限定面に於て自己自身を限定した時、それが有限數となる。有限數とは限定せられた一般者に於てあるものである。限定せられた一般者は限定する一般者を含むとは云へない。併し限定する一般者即ち私の所謂場所とか超越的述語面とかいふものは、限定せられた一般者即ち自己限定面を含むと云ふことができる。矛盾を含む一般概念はないと考へられるが、それはいつも限定せられた抽象的一般概念を考へて居るからである。元來、自己自身を限定する具體的概念はヘーゲルの云ふ如く矛盾を内に包むものである。具體的概念の場所に於てあるものは、直覺的なるものとして何處までも限定することはできない、我々は之についてヒルベルトの如く唯矛盾せないと云ひ得るのみである。矛盾を考へ得るのは、具體的一般者に於て一つの一般者が限定せられた場合でなければならぬ、かゝる場合之に於てあるものが又之に於てないと云はれない。無限數と考へられるものは、本文に於て云つた如く既に抽象面的に限定することのできない直覺

によつて考へられるものである。個物が抽象的一般者にその影を映す如く、有限數的限定面にその影を映すのみである。唯主語となつて述語とならないと云ふ如く、無限に達すべからざるものとして考へ得るのみである。かゝる直覺面に於てあるものは、推論式的一般者の形に於て大語面的に限定し得るかぎり、限定し得られるのである。それが法則的に限定し得られるかぎり、限定し得られるのである。その外多くの矛盾なくして *Frei werdende Wahlfolge* といふ如きものを考へることができるであらう。

數學に暗き私は數學について論ずる資格はないが、數學的知識とは自覺の底に考へられる無限に到達することのできない形式的直覺面を有として、之を含む具體的一般者の自己限定によつて成立すると考へることができであらう。先づ無限に到達することのできない形式的自覺の過程といふものが所謂 *Fundamentalfolge* と考ふべきであらう、自然數の系列である(ポアレカレの *la puissance de l'esprit qui se sait capable de concevoir la répétition indéfinie d'un même acte* の直覺といふのも此の如き自覺に當るものでもあらう)。 *Kardinalzahl* といふのは、かゝる無限に自己自身を限定する自覺の内容を、その自己限定面たる抽象的一般者に於て限定したものである。

斯く限定せられた時、無限なる自覺の系列はその系列的性質を失つて單なる抽象的一般者の外延といふ如きものとなる。抽象的一般者を單に一つの一般者として考へれば無媒介的なる一般者として、之に於てあるものから順序性といふ如きものを除去することができるのである。斯くして限定せられた一般者數學者の所謂集合と一般者との間には、即ち集合と集合との間には、唯外延的關係が考へられるまである(一々の對應といふものがそれである)。抽象的一般者は自己自身の自己限定作用を含まないと云へども、之に於て種と類との分類的關係が成立するのである。集合論に於ける *Verbindungsmenge*, *Vereinigungsmenge* といふものは之によつて考へられるのであらう。右の如くにして限定せられた數はアレフ・ヌルを越えることはできない。抽象的一般者は自己の中に自己自身を限定するものを含まないから、如何なる自覺的限定の過程も之を抽象的一般者に於て限定すれば、同じものとならなければならぬのである。而して又有限數に於ては *Kardinalzahl* と *Ordinalzahl* といつても一致すると考へることができ。何となれば抽象的一般者が述語的統一面と考へられる時、之に於てあるものが順序數と考へられるのであつて、具體的一般者の超越的述語面に於てある直覺面的自己其者の種々

なる限定形式は此中に入つて來ない。之に反し、無限數といふものが考へられる時我々は既に直覺面的自己の限定の立場の上に立つて居るのである。斯くして最始に考へられる自己限定の形式が順序數オメガである。併し直覺面的自己の限定形式としては、上に云つた如く無數の *frei verwendende Wahlfolge* といふものがあり得るであらう。具體的一般者の底に直覺的なるものが見られる時、それ等は小語面的に與へられたものとして、大語面的に限定し得らるゝもののみ、判斷的一般者に於て限定し得られるのである。

數の世界といふものが右の如き一般者の内容として限定せられるものとするならば、Operation といふものはかゝる一般者に於てあるものゝ自己限定作用と考へることができらるであらう。形式的自己の直覺面的内容を抽象的一般者に於て限定することによつて數の世界が成立するとして、私にかゝる限定的統一が乘法といふものではないかと思ふ。抽象的一般者の限定といふのは、類の上に類を、種の下に種を重ねて行くことである。かゝる限定の系列によつて抽象的一般者の限定が直覺的なるものに結び付くのである。Veräinigungsmenge といふのは此の如きものかと考へる。之に反し抽象的一般者に於て限定せられたものゝ單なる外延

的結合が加法といふものと考へることができらう。數學に於て群と考へられるものは自己自身の中に自己自身の限定を含んだ一般者である、具體的一般者の形を成したものである、自己自身を限定する直覺面的自己の影像を含んだ一般者である。かゝる自己の影像が群の Identität と考へられるものである。例へば乗法を Kompositionregel とした時、零を除いた正の有理數の體系が一を Identität として一つの群をなす、此場合一とは直覺的自己の影像である。之に反し加法又は減法を結合法とした時、整數が零を Identität として一つの群をなす、抽象的一般者の外延的統一だけを考へた時、自覺的自己の限定といふ如きものはその背後に隠れなければならぬのである。零とは自己自身の限定を失つた死せる自己である、抽象的一般者の限定といふのは元來かゝる自己の限定である。一といふのは抽象的一般者を特殊化して行つて、最後の種に於て種差と外延とが一となる時考へられるのである。此點に於て抽象的一般者に於てあるものが具體的一般者に於てあるものと觸れると考へることができらう。

附録二 幾何學的直覺といはれるものは知覺的自己の形式的直覺と考へ得るであらう。知覺的直覺面といふのは、判斷的一般者に於ける述語的統一面の如く、感

覺的直覺面が自覺的直覺面に於てあるものゝ限定面として考へられたものである。かゝる直覺面が叡智的自己の統一相を映すものとして、自己自身の限定の形式を有し、かゝる自己の形式的直覺が、幾何學的直覺と考へられるものと思ふ。

種々なる感覺の系列が逆に繰返すことができ、一つの Dimension といふ如きものが考へられると云ふことは既にかゝる直覺面がそれ自身の中に自己自身を限定するものを有つと云ふことを意味する、一つの自己を有することを意味するのである。かゝる自己の形式的直覺の體系が幾何學的直覺の體系を成すのである。射影幾何學的群といふのはかゝる直覺的自己を含んだ一般者と考へ得るでもあらう。それが自覺的自己に結合した時、metrischer Raum となる。而してそれは實在的空間の意味を有つて來なければならぬ。物理的空間といふのは自覺的自己の底に見られる叡智的自己の感覺面と云ふべきものであらう。

附録三 一般者の底に之に於て限定することのできない超越的なるものが考へられ、一般者が直に自己自身を限定すると考へられた時、かゝる一般者の限定が範疇的限定と考へられるものであり、その限定形式が範疇と考へられるのである。そこには範疇本來の意味であつた述語的限定の意味があるのである。一般者が



自己自身を限定するに従つて、自己自身は限定すべからざるものとして、之に於てあるものが自己自身を限定するものと考へられ、その極之に於てあるものが超越的となるに及んで、一般者が直に自己自身を限定すると考へられる。故に範疇的限定は又自覺的限定とも云ひ得るであらう、睿智的自己が自己自身を見る自己限定の形式とも考へ得るであらう。カント哲學に於て考へられる範疇とは自覺的自己即ち構成的自己の範疇であるが、單に自己自身を映す自己即ち直覺的自己の範疇といふ如きものも考へることができらう。それが抽象的一般者の限定として反省的範疇と考ふべきものである。無論、睿智的自己の限定といふのはノエマ的なると共にノエシス的であり、範疇によつて有るものが限定せられると云ひ得るかぎり、直覺と構成との二面は離すべからざるものではあるが、そのいづれを主とするかによつて相反する兩極端といふものを考へることができらう。而してノエマ的に限定し得られるかぎり、自己自身を見るものゝ内容が限定せられるのであるから、具體的一般者が抽象的一般者を自己限定面として之を含むと考へることができらうが、ノエシスはノエマを含みノエシス的なものが有るものそのものを限定すると考へれば、逆に抽象的一般者が具體的一般者を含み、その後

にある超越的場所として何處までも廣がること考へることができる。叡智的自己を限定する知的直觀の一般者といへども、具體的一般者としてその背後に之を包む抽象的一般者といふ如きものを考へることができる。それは絶對無の場所として、すべて有と考へられるものゝ根柢を限定するものでなければならぬ。かゝる意味に於ては反省的範疇が構成的範疇を含み、いつもその超越的場所となること云ふことができる。具體的一般者に於て、その限定面として之に含まれること考へられる抽象的一般者は具體的一般者を包む超越的述語面、即ち場所と考へられるものゝ限定せられたものに過ぎない、即ち限定せられた場所とも云ふべきものである。かゝる限定面を自己の中に含むと云ふことは自己が超越的場所によつて包まれて居ることを意味するのであらう。構成的範疇は内容を限定し、反省的範疇は外延を限定すると考へることができる。